

其の秘蔵の御姫君有々を関白秀次公あまりに御取堅
故もたしかとて上方へ参らせ給ひし所に結句は對面
もまはさま 利く秀次公言珠山とて中生害あり依て
大割より石田と福増に仰せ秀次公のおもひ人々文
六条河原に訪て害ある然義光公の姫君と且内にて
折哉義光公在京の事故は由をゆゑかみみ思召
て前日に浦山に就後とて若に佐々木秀次公のおもひ人
三座河原に訪て害せらるる事なり 我々娘も且内あり
は難人に移されし娘の御後の神守とせよと涙あふ
言ひし其の事細畧しつゝまゐる日迄とてまゐる中々るは

明日あるの御使に参らせとてり 今方跡の事宜敷頼合と
中々其是に不審あり大なるの御使に参らせとてり 且
これに就後中移されしはもてさるにありし明日姫君
此の御後の神守とて参らせし御守り三代御恩の存
形の姫君御生害免やとてり 其分にて立歸り何事
まけんや然れ難兵の手にかへしあかす中々其の貴族の存念
中々其の御守りも腹をみて死出三途の御供中御守り
かきりたる御守りもあかす中々其の貴族の存念
玉極まりあまの御守りの御守りもあかす中々其の貴族の存念
左様のお守りもあかす中々其の貴族の存念